

氏 名	にし お 新
学位の種類	博 士 (教育 学)
学位記番号	教 博 第 36 号
学位授与の日付	平 成 15 年 9 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	教 育 学 研 究 科 教 育 科 学 専 攻
学位論文題目	発話にともなう身振りの機能

論文調査委員 (主 査) 教 授 子 安 増 生 教 授 吉 川 左 紀 子 助 教 授 楠 見 孝

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、発話にともなう身振りの機能を、観察および実験によって明らかにすると共に、身振りに関する発達研究および手話研究の成果を踏まえて、身振りの機能に関する新しいモデルを提案したものである。本論文の各章の構成は次の通りである。

第1章では、まず本研究の目的と本論の構成が示され、先行研究において、「身振り (gesture)」を表わす用語およびその下位カテゴリーの適応範囲の整理が行われた。身振りの性質として、(1) 発話内容あるいはその流れと密接に関連する動作であること、(2) 話し手は発話にともなう身振りをを用いて情報を伝達しようとする意識が希薄であること、(3) 発話にともなう身振りの形態は個々の発話内容に規定されており文化的には規定されていないこと、の3点をあげ、その下位カテゴリーとして表象的身振りとビート身振りに、さらに表象的身振りは同型的身振りと定位的身振りに分けられることを提唱した。

第2章では、発話にともなう身振りの機能に関する先行研究をアプローチおよび研究手法ごとに整理し、さらに身振り研究に新たな視点をもたらすものとして、幼児のカウンティング時の指差しに関する発達的研究の成果を分析した。

第3章では、身振りの表記法を開発するために、身振りが発現する位置、運動の種類、手の形と掌の向き、左右の手の協応、他の身振りとの連続の有無など、身振りを7つの構成要素に区分し、各構成要素におけるカテゴリーとそれを表わす符号および表記順序を定式化した。

第4章では、大学生の比喩的身振りおよび定位的身振りを観察し、比喩的身振りの軌道に付随して語句の意味を表すイメージ図式が現れること、そのイメージ図式が発話者間で共通していることを示した。また、定位的身振りの観察から、発話者が複数の概念・対象に関して対比的に言及する際、それぞれの概念・対象は個別の空間に定位されることを示した。

第5章の第1実験では、語句説明課題と漫画説明課題を用い、表象的身振りとビート身振りの発現頻度に及ぼす聞き手からの見え、声による応答、話し手が感じる聞き手の存在感の影響を検討した。その結果、表象的身振りに関して対面状況における高い発現頻度が示された。また、ビート身振りに関しては、話し手が感じる聞き手の存在感 (同室か別室か) の意義が発現頻度に影響を与えることが示された。

第6章の第2実験では、語句説明課題を用い、身振りの発現頻度の個人差に影響する発話者の要因を検討した。その結果、対面・非対面状況ともに、認知スタイルの分析性・抽象性得点の高い被験者 (話し手) ほど、表象的身振りの発現頻度が高くなる傾向が示された。さらに非対面状況において聞き手に対して親しみやすさを感じている被験者 (話し手) ほど、表象的身振りの発現頻度が高くなる傾向も示された。

第7章の第3実験では、使用法の熟知価は高いが名称の熟知価が低い道具 (例：トング、ラバークップ、大幣、馬簾など) の名称をターゲット語とし、その形状や使い方の説明の際、身振りをを用いる群と身振りを抑制する群との間でターゲット語の再生率を比較したが、身振りの促進的な効果は認められなかった。

第8章の第4実験では、「ハノイの塔」課題において、身振り自由条件では自発的な定位的身振りが観察されるが、身振り抑制条件では、手・指以外の身体部位で補償的な動作が観察された。

第9章では、以上の観察および実験の結果から、発話にともなう身振りは、「伝達意図」および「情報意図」の2重の意味において聞き手指向的であることとその理由を考察した。すなわち、本研究の結果に加え、身振りに関する発達研究と手話研究の成果から、身振りが「言語」としての可能性を秘めた身体行為であり、他者の存在を契機として発現し、聞き手に対する伝達手段としてあるいは自らの思考を支える手がかりとして、状況に応じてダイナミックにその様相を変化させる認知的道具であることが示された。

論文審査の結果の要旨

発話時に手を動かす身振りは、人によってはかなり頻繁に起こるものである。しかし、その意味については、本人も意識や自覚に乏しいだけでなく、19世紀のWundt, W. 以来の研究史がありながら、科学的解明は必ずしも十分に行われて来なかった。論者は、身振りの表記法の標準化を行い、身振りの分類を体系化しつつ、人間の言語コミュニケーションにおける身振りの意味を明らかにする観察と実験を積み重ねてこの問題に取り組んだ。

論文の第1章～第3章は、身振り研究の理論的展開部であり、身振り研究の歴史的展望（第1章）、先行研究の方法論的検討（第2章）、身振り表記法の定式化（第3章）が行われた。論者は、McNeill, D.らの先行研究を丁寧に振り返り、身振りを「表象的身振り」と「ビート身振り」に大別し、前者を「同型的身振り」と「定位的身振り」に分ける立場を提唱し、手の運動の方向のみでなく、運動の種類も示せるようなオリジナルな表記法を提案した。

第4章は、大学生の身振りのイメージ図式的側面を認知意味論から検討したもので、たとえば「高い」「憧れ」を眼の高さの位置で右手の掌を上向きに返してあらわす隠喩的投射（同型的身振りの一種）、対比的な二つの概念を語る発話者が自分の前の空間に何かを置くように示す存在の比喩（定位的身振りの一種）の二種類の身振りを中心に分析した。

第5章（第1実験）では、伝統的な対面—非対面パラダイムに同室—別室の条件を加え、語句説明課題と漫画説明課題を用い、表記的身振りとビート身振りの発現頻度に及ぼす影響因を調べた。その結果、対面状況で表象的身振りが多いこと、その傾向は具体的、空間的な漫画説明課題で顕著であること、ビート身振りに関しては、同室か別室かという話し手が感じる聞き手の存在感が影響を与えることが示された。ただし、身振りが自己指向のか聞き手指向のかを決めるには、対面—非対面パラダイムに方法論的限界があることも指摘された。

第6章（第2実験）では、語句説明課題を用い、身振りの発現頻度の個人差に影響する発話者の要因を検討した。その結果、対面・非対面状況ともに、認知スタイルの分析性・抽象性得点の高い被験者（話し手）ほど、表象的身振りの発現頻度が高くなる傾向が示された。さらに、非対面状況において聞き手に対して親しみやすさを感じている被験者（話し手）ほど、表象的身振りの発現頻度が高くなることも示された。

第7章（第3実験）では、使用法の熟知度は高いが名称の熟知度が低い道具の名称をターゲット語とし、その形状や使い方の説明の際、身振りをを用いる群と身振りを抑制する群との間でターゲット語の再生率などを比較検討した。

第8章（第4実験）では、3本の棒の間で円盤を一定の制約のもとで移動させる「ハノイの塔」課題において、身振り自由条件では自発的な定位的身振りが多く観察されるが、身振り抑制条件では、手・指以外の身体的部位で補償的な動作が観察された。

これらの研究は論者のオリジナルな研究方法に基づく実験であり、言語発達分野におけるVygotsky, L.の理論を身振りに敷衍して考えるユニークな視点から考察されている。

しかしながら、第3実験および第4実験は被験者が少なく、結果も必ずしも明瞭なものでなく、アイデア先行となっている。このことも含め、実験方法をさらに洗練してデータをとればもっとよい結果が得られたのではないかとこの点が幾つかあったことが惜しまれる。また、議論の展開において、イメージ図式の理論と言語コミュニケーション（発話）の理論が幾分混交している点も、論点を不明瞭にしているきらいがある。

このように幾つかの問題点がないわけではないが、発話と身振りの関係を実証的に明らかにしようとする意欲的な研究であり、その知見は教育認知心理学にとって重要である。

よって本論文は、博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成15年8月21日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。